

Title	「間」と「程」：『今昔物語』を中心としたその意味と文体
Author(s)	山内, 貴子
Citation	語文. 1982, 40, p. 54-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68699
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「間」と「程」

——『今昔物語』を中心としたその意味と文体——

山内貴子

はつづめ

ここでは、同様の機能を持つ三つの語、活用語の連体形に承接して句を構成する形式体言的用法の「間」^(注1)と「程」^(注2)を対象に、それらが時代の推移に伴ってどのように使い分けられてきたかを探ってみたいと思う。

こうした「間」が、変体漢文特有語^(注3)であり、一方、「程」は、和文、変体漢文には用いられるが、漢文訓読文には認められない事が峰岸明氏^(注4)によって指摘され、更に、この語の使用状態から、『今昔物語』が、巻二十を境に前半は漢文訓読文、後半は和文脈の色彩が濃厚であるという従来指摘されてきた事実に加え、前半部には変体漢文の影響が著しい事が認められた。ところが、松尾拾氏の調査によると後半、「間」が「程」に比べて著しく少ないのは、変体漢文の影響を受ける説話が、この部分に少ない為といえるが、前半では両者の差があまりない。特に、「程・間」共存型の説話の前半に「程」が多い。これを「程」の和文的側面が後半に現われ、変体漢文的側面が前半に現われたとみるのはあまりに機械的すぎるといふ松尾氏の意

見は、至極当然である。それでは何故、前半部に「程」が多いのだろうか。その原因の所在は、次の二つに大別される。

I 『今昔物語』が影響を受けたと考えられるそれ以前の変体漢文に存する問題

II 『今昔物語』自体に内在する問題

以下、この問題について考えながら、「間」と「程」の使用区別の様相と、その基準の変化を追ってみたいと思う。

一、『今昔物語』以前の「間」と「程」

1 和文系における「ほど」

中古和文系において多用され、意味の拡がりをみせた「ほど」の一般的性格は、従来の指摘^(注5)を考えあわせると、曖昧さ、漠然性ということになろう。こうした「ほど」は意味のうえで大きく二つに分類されるように思う。一つは、現代語では主に「あいだ」や「うち」と訳される、ある幅を持ち、範囲を示すもの——^(A)であり、

(1) 思ひかけず、臥しはべりしほどに、はかなくて明けりけり。

(落窪物語)

もう一つは、「時」「ところ」などのようなある点を中心とする表現である。——⑩

(2) 日やうやう暮るるほどに、少しやみたる雨、降ること限りなし。
(落窪物語)

そして、「ほど(に)」は、その性格から、双方に対してある漠然性を付与する。つまり「ほど(に)」には、ある一点を示す「時に」に対して、ある一点を中心としてその周囲を漠然とさす「時分に」の用法と、ある幅を持つてはいるが、その枠がはっきりと定まっていないうちのまを表わす用法があり、後者に対応する語が、ある物と物、或は事と事との枠組が、はっきり定まった範囲内を示す「あひだ(に)」であったと考えられるのである。直接的表現を嫌い、曖昧でぼかした表現を好む中古和文系において、「ほど」が多用され、逆に「あひだ」が用いられなくなっていた原因の一つは、この両者の意味の違いにあるといえよう。なお、濱田敦氏は、万葉集を例に、「あひだ」は過去形をとり、「ほどに」は過去形をとらないとされたが、過去になされた行為については、既に終着点をはっきり定まっているので、「間に」のとする事態に過去は出現するが、「ほどに」の場合、終着点は問題としないのだから、過去に起こったことでも現在の形をとるのであろう。この相違は『土佐日記』あたりまでしか続かず、その後は和文系の「ほどに」も過去形をとるようになる。(注8) (表一参照)

2 文体的分化

次に、変体漢文系について、表一をもとに史的に追っていくことにしよう。『将門記』と『土佐日記』は、ほぼ同時期のものである

表一 和文系・変体漢文系における「間」「程」の使用状況

変体漢文系			和文系		
作品	間に	程に	作品	間に	程に
万葉集	11	3	竹取物語	1	7 (-1)
伊勢物語	3	7	古今集	6	1 (-1)
土佐日記	9	3	大和物語	3 (-1)	36 (-3)
将門記	21	7	落窪物語	0	92 (-7)
小右記(上)	約400	14	源氏物語	2 (-1)	35 (-23)
御堂関白記(上)	約100	3	大鏡	2 (-2)	119 (-54)
後二条師通記(上)	80	46			
“(中)”	116	49			

(注)

- 1 テキストは本文末に記載
- 2 () 内に一で示してあるのは上の数字中「に」のつかないもの
- 3 大和物語は付載説話を除く
- 4 源氏物語は「ほど(に)」についてのみ須磨・明石に限る
- 5 後二条師通記は上・中で文体の性格が多少違ふと思われ、調査は両者で別々に行なった(『国語学研究事典』参照)
- 6 古今集の用例は全て詞書及び左注の部分

が、この時期あたりまでは、「間」と「程」は、まだ位相的、文体的に未分化な状態であったと考えられる。というのは、第一に、変体漢文系において、『将門記』とそれ以降の資料とは、「間」と「程」の比率が大きく違う事、第二に、『土佐日記』における変体漢文の影響については、従来から論じられていたとしても、『古今集』の用例数等、和文系においても、『土佐日記』以前では、その後の和文系に特徴的な「ほど」の多用は、それほど明確に現われていない事、第三に、数量だけでなく、用法上も、『将門記』と上代の用例（『万葉集』、『古事記』）が近似しているのに対し、『小右記』、『御堂関白記』では、「間」の意味用法が非常に拡大している事による。この意味の拡大は、和文系における「ほど」と同様の傾向を示しているが、位相的、文体的に分化したものが、それぞれの系統で広い意味範囲を担ったとみることができよう。

そうした中で、『将門記』や上代に現われていた「二つのものはさまれた部分^(注11)」という「間」本来の用法とは異なるもの、すなわち、前件の動詞は普通、継続性のあるものだが、継続性のない動詞を前件とする「間」が現われてくる。これは、「間」の接続形式としての熟化を表わしているといえるが、その中には、時間的にみると、第一の動作が完了してから第二の動作が行なわれる——継起性を持つ——と考えてよいものがある。

- (3) 大臣擬復陣之間、於途中、以片手披詔 (小右記)
 (4) 出彼寺間、騎馬者廿余人追来…… (御堂関白記)

この用法の萌芽は、既に『将門記』に「スルノアヒダ」という形で見受けられる。

- (5) 乃擬首途之間、亦將門伺隙追来……

また、こうした用法は『後二条師通記』では非常に多くなり、更に、『今昔物語』の中にも流れ込んでいる。

- (6) 步行到桂河間、乗船 (後二条師通記)
 (7) 其ノ児、五、六歳ニ成ル間、泥土ヲ以テ仏像ヲ造リ草木ヲ以テ堂ノ形ヲ建ツ (今昔 十一ノ9)

これらの多くは、前件が後件のきつかけとなる機縁性を持つものといえるが、ここに、同じく前件に継続性のない動詞を持ち、しかも時間的に前述のような継起性では処理できない別の一群がある。

- (8) 日欲出之間、参内 (小右記)
 (9) 出廁之間、折腰 (小右記)
 (10) 事了退出間、小雨下 (御堂関白記)

こうした「間」は、丸山諒男氏の論文^(注12)にもあるように、「スル時」「時分」「折」の意と認められよう。では、何故、「間」に本来の用法ではない、ある一点、または、ある一点を中心としてそのあたりを示す用法が現われたのだろうか。これは、和文系における「ほど」からの流用、或は類推適用とでもいうべきものと考えられないだろうか。「ほど」には、この「時分」の用法⁽⁸⁾がある。しかも、『小右記』、『御堂関白記』の頃、和文系では「ほど」の全盛期であった。位相的、文体的分化の後、和文系の語「程」は変体漢文にはあまり用いられなくなった。そこで、「間」が「程」⁽⁴⁾の用法とほぼ同様の意味、機能を持っていた為、本来「間」にはなかった「程」⁽⁸⁾の用法まで「間」が表わすようになったのではないか。「間」が既に接続助詞化し始め、その体言としての意義を失いつつあったことも、この変化を促進したと思われる。

3 変体漢文の変質

ところで、『後二条師通記』では、それまでとはうって変わって、「程」の用例数が増し、「間」との比率は約一対二に及んでいる。この事は、変体漢文が、こうした接続形式に関して、和文脈をとり入れ、消化し、変質してきたことを物語っている。ここで問題となるのは、資料の性格であるが、連体格に立つ同題の表現の「殊」^{（注13）}「指」^{（注14）}「別」による位置付けでは、和文系に用いられる「殊」が『御堂関白記』に多く、一方、変体漢文系に多用される「指」「別」が『御堂関白記』には見えず、『後二条師通記』に多いということから、『後二条師通記』がとりわけ和文的な資料である為に、「程」が多いとはいえないことが確かめられる。

では、どういうところで「程」がその勢力をもり返しているのだろうか。それは、

- (11) 京御出程 晴 (後二条師通記 上)
 (12) 舞臺程 起座 (後二条師通記 中)

等、だいたいにおいて、「程」⑩の用法といえる。このことから、変体漢文における「間」の「時」「時分」という意味用法が文体的分化による「程」の代替的用法であったという前節の考えが確かめられるのではないか。

以上、『今昔物語』以前における「間」と「程」の使用状況を簡単にみてきたが、『今昔物語』本朝前半部に「程」が多い一因として、史の変遷過程において、既に『今昔物語』以前、変体漢文が変質し、「程」を多く含むようになっていたということがあげられよう。次に、『今昔物語』自体の検討に移らう。

二、『今昔物語』に内在する問題

1 前半に混入する和文系説話

——出典未詳説話の位置付け

従来から、『今昔物語』前半に漢文訓読調が強いのは、仏典、漢籍を依拠文献とするものが多いからであろうということがいわれている。ここで、本朝前半部に「程」の多い一因として、この部分に和文系の説話が多く混入している為ということが考えられよう。そこで一つの目安として、出典の比較的確かな巻をあげて、「間」と「程」の割合を比較した(表二)。やはり、本朝前半部で変体漢文系としてとりあげた巻十五に、かなり「程」が多いことが目につく。次に、本朝前半部から、和文系といわれる『宇治拾遺物語』及び『打聞集』

表二

	総用例数の 間+程の	間+程 ×100 %	程+間 ×100 %
漢文訓読系	45	67	33
変体漢文系	87	52	48
和文系	215	21	79

(注) 漢文訓読系として巻七、変体漢文系として巻十五、但し双方とも和文系といわれる『宇治拾遺物語』「打聞集」との共通説話を除く。和文系として「宇治拾遺物語」「打聞集」との共通説話をえらぶ。

	①字治・打開共通説話 中の用例を除いたもの			②和文系に近いと認定 された出典未詳説話だ けを除いたもの			③出典未詳説話すべて を除いたもの		
	総 用 例 数	間 間+程 ×100 %	程 間+程 ×100 %	総 用 例 数	間 間+程 ×100 %	程 間+程 ×100 %	総 用 例 数	間 間+程 ×100 %	程 間+程 ×100 %
卷11	54	70	30	52	69	31	39	77	23
卷12	89	69	31	80	73	27	65	74	26
卷13	75	61	39	65	68	32	63	70	30
卷14	50	50	50	40	60	40	31	70	30
卷15	87	52	48	66	65	35	55	73	27
卷16	87	37	63	55	46	54	19	85	15
卷17	85	56	44	66	67	33	62	68	32
卷19	107	23	77	23	35	65	8	5	3
卷20	68	38	62	60	37	63	32	58	42

1 注

②の卷十一、十二、十三の出典未詳説話には、他の巻と同様、「程」が多くみられ、文体的にも和文系に近いとされた説話がある一方、むしろ、和文系から離れて「間」がみられるもの(十一ノ24、十二ノ21等)があり、別扱いにした方がよいと思われる。

2 ③の卷十九については、用例数が少なく百分率を出す意義を認めなかった。左肩の5と3はそれぞれ振り分けられる用例数である。

3 ④はすなわち、出典の一応わかっているもので、本朝前半部においてはほとんどが変体漢文系といえる。約七割以上が「間」で、ここからも「間」と「程」が文体に関しつめぐるし語となりうる事がわかる。

との共通説話の用例を除き、それぞれの巻について「間」と「程」の割合を出してみたのが表三左列である。巻十一、十二、十三については、六割以上が「間」の用例であるが、その他の巻については「程」が多く、四割以上を占めている。そこで、もう一度、巻十五に戻って、その出典と「間」「程」の用例数の関係を検討してみた。その結果、一説話あたりの「程」の比率の高いのは、出典未詳説話であるという特徴がうかんできた(表四参照)。つまり、出典未詳説話はこの本朝前半部に多数あるが、それらは、和文体の散佚先行資料によるか、少なくとも和文系の文章に近いものが多いのではないかと考えられるのである。そこで、出典未詳説話の文体を、松尾氏のたてた八対の目じるし語の現われる頻度^(注15)によって、非訓読的説話群、中間的説話群、訓読的説話群に分類し、そのうち、前二者と認定された説話中の用例を全てとり除いてみたのが、表三中央列であ

表四

	「間」の数	「程」の数
	1	1
	1	1
	4	1
	2	2
	1	1
	1	1
	2	1
	3	1
	4	1
	3	1
	3	1
	1	1
	2	1
	1	1
	1	1
	1	1
	1	1
	2	1
	1	1
	5	4
	4	4
	4	4
	5	5

巻十五で「程」の現われる説話23のうち、「宇治拾遺物語」「打聞集」共通説話3をのぞいた20説話について、それぞれの「程」と「間」の用例数

る。先程、「程」の割合が高かった巻十四以下の出典未詳説話の約三分の二がこのうちに含まれる^(注16)。そして、巻の性格は次のように三分される。

(a) 右のような操作なしでも「間」が六割以上の多数を占める巻——十一、十二、十三

(b) 右のような操作を行えば「間」が六割以上となる巻——十四、十五、十七

(c) 右のような操作を行っても、依然として「程」の割合の高い巻——十六、十九、二十

だが、ここにも様々な問題が含まれている。巻十九は、ほとんど出典未詳説話である。このような巻で、前述のような操作はあまり意味をなさないと見える。また、「程」の多い説話の中には、たとえばその説話中の一部の原典名がはっきり挙げられているとしても、複数出典と考えられているものも多い(十二ノ28、33、34、35、十六ノ8等)。こうした説話の特徴は、「間」も「程」も双方共の用例数が多いことである^(注17)。これが、「間」「程」共存説話に「程」が多いという事実と符合するのは偶然ではないだろう。

こうした複雑な様相の中から、文体の認定自体に対する疑問が生じてくる。目じるし語による分類では訓読系説話群に含まれるが、同じく松尾氏の主格表示による分類では比較的和文系とされる説話(出典未詳説話では十四ノ39、十五ノ15、十六ノ15等々)があるということもその疑問を大きくさせる要素である。松尾氏は、説話ごとの文体として、これらの分類を行なわれたが、しかし、もう一歩進んで、説話中の部分ごとの文体というものが存在する可能性があるのではないか。つまり、前述の複数出典の問題からも、編者の

潤色、典拠資料のつなぎ合わせなどによる文体異同が、同一説話内にも存在すると考えられる。そこで、出典未詳説話の位置付けをもっとはつきりを行なう為、文体認定に関わらず、全ての出典未詳説話を除いたのが、表三右列である。全ての巻において、「程」の割合がかなり低くなっている。このことから、残り三分の一をも含むほとんどの出典未詳説話が「程」を多く含み、その為に、本朝前半部における「程」の割合が高くなっていたことがわかる。そして、今昔物『語』においてもやはり、表二にみるように和文系文章に「程」が多いことから、出典未詳説話には和文系の文章が多いと考えてよいのではないだろうか。しかし、一章でみた如く、史の変遷過程において、変体漢文系で「程」の増加をみている為、ここでもう少し、「間」と「程」による文体の位置付けの信頼性を確かめておく必要があるだろう。

前半部が、漢文訓読的、或は変体漢文的文体であるという従来の見解は、かなり大まかなとらえ方であった。たとえば、峰岸氏の「間」による考察では、(c)グループをも含めて、前半部では確かに「間」の用例数が多く、その数だけを見ると、巻二十を境に大きく文体が変わっているように見える。しかし、「程」の用例数と比較してみると、(c)グループでは「程」は「間」よりも更に多用されていることがわかる。すなわち、「間+程」の全量が、他の巻に比べて多いのである(特に巻十六、十九)。また、総じて、巻十九、二十は、一説話あたりの分量が多く、複数出典の問題が、これらの巻に影を投げかけていることを示唆する。更に、従来の見解でも、前半部の中に、かなり和文的要素の現われる巻があることが指摘されている。そうした、従来様々な目じるし語によって調査された結果と、(c)グループを多少異質なものとしたこの「間」と「程」による分類とがほぼ

一致することから、「間」と「程」が、文体に関して、ある程度^(注19)目じるし語となることが確かめられよう。

2 「間」「程」と原典との関係

前節では、主に出典未詳説話の位置付けを行なったが、次に、出典の比較的確かな説話について、原典の影響がどれだけ『今昔物語』中の「間」「程」に現われているかを検討する。「間」や「程」が、本来、漢文訓読文に現われてこないことは前述の通りである。ところが、表三では、和文系、変体漢文系よりは少ないとはいえ、両者合わせて四十五例も現われる。峰岸氏は例をあげて、こうした「間」が原典漢文の翻案によって現われることを示しておられるが、^(注20)「程」についても、やはり、同様のことがいえるだろう。

(13) 行数十歩 王復呼還(冥報記 中18)

数十歩ヲ行ク程ニ、王、亦、山龍ヲ喚シテ…… (七ノ30)

また編者の潤色と思われる部分にも見える。

(14) 挙目視門。門已閉。(冥報記 上2)

目ヲ挙テ獄門ヲ見レバ、鐵ノ湯ノ中ニ百ノ頭有リト許見ル程ニ、門既ニ閉ゾ。 (七ノ46)

では、変体漢文系(日本で書かれた漢文のもの)ではどうだろう。本朝前半部が主な出典としている原典の性質と、『今昔物語』中の「間」「程」の現われ方をみてみよう(表五参照)。

『日本往生極楽記』『日本靈異記』には共に「程」は見えず、接続形式としての「間」もごくわずかしか現われない。

(15) 勤王之間 誦法華經(日本往生極楽記)

(16) 彼柱之析間 電樑所捕(日本靈異記)

これらを出典とする『今昔物語』中の「間」「程」もほとんど全て翻案潤色で漢文の場合と同様である。

『三宝絵詞』には「程」が多くみられる。今昔物語中の同文的說話と比べてみた結果、次のようなものがみられた。(前田家本『三宝絵詞』、観智院本『三宝絵詞』、『今昔物語』の例を並べて示す。)

(1) 原典の「程」がそのまま用いられている例

(17) 夫人廻宮中至厥許程 不覚生給 (二一)

夫人宮ノ中ヲ巡リテ厥ノモトニイタルホトニ覚エズシテ生レ給ヘリ。

夫人、宮ノ内ヲ廻リ行テ□ノ□至ル程ニ太子生レ給ヘリ。
(十一ノ一) □は欠字)

(2) 原典の「程」が「間」になっている例

表五

	総用例数	間	程
		間+100% ×100%	程+100% ×100%
三宝絵詞	29	76	24
日本往生極楽記	34	89	11
日本靈異記	66	75	27
法華験記	136	62	38

それぞれの作品を出典すると『今昔物語』の説話の中の「間」と「程」

(18) 「……中略……」申程 日羅大放身光 (中一)

「……中略……」ト申ス程ニ日羅大ニ身ノ光ヲ放ツ。

……中略……ト申ス間、日羅身ヨリ光ヲ放ツ。(十一ノ一)

い「に」が「間」になっている例

(19) 吾曰来求汝 飢羸 (中14)

我日来汝ヲモトメツルニ飢ツカレタリ

求ムル間ニ我等飢羸レニタリ (二十ノ19)

(20) 聖武天皇 承伝欲弘作之間 道慈之僧有 (下3)

聖武天皇 守ツタヘテヒロメツクラムトスルアヒタニ 道慈トイフ僧アリ

聖武天皇、受伝ヘテ被造レムト為ル間、道慈ト云フ僧アリ

(十一ノ16)

(21) 佛しかしなんといいても、原典にあまり見られない「間」が『今昔物語』の中で七割を占めている要因は、原典の二つの文章を接続し、一つの文章に翻案する為、「間」を使用している例にあるといえる。

(22) 始入比叡仙 結蘆勤行 香炉灰中得仏舍利 (下3)

ハジメテヒエイノ山ニ入テイホリヲ結テットメ行フ。香炉ノ

灰ノ中ニ仏ノ舍利ヲ得タリ。

始テ今ノ比叡ノ山ノ所ニ入テ草ノ菴ヲ造テ仏ノ道ヲ行フ間ニ、

香炉ノ灰ノ中ニ仏ノ舍利出給ヘリ。(十一ノ10)

『法華験記』には「間」が多数見られる。

(1) 原典の「間」がそのまま使われている例

(22) 時蠶蟻多集嘔身肉間 生入蠶子 (下88)

身ヲ喰ム間 痛ミ難堪シト云ヘドモ…… (十三ノ22)

(向) 翻案として現われる「間」は多い。

(23) 無定住所 慮外迷山路 至此仙洞 (中59)

山林ニ入テ仏道ヲ修行スル間、道ニ迷テ自然ラ来レル也 (十三ノ4)

「程」もごくわずかであるが原典に現われる。

(24) 至夜半程 有乗騎人二三十騎 (下128)

但、この例では、「夜半ノ程ニ至リテ」か「夜半ニ至リシ程」かは判然としない。この部分を出典とする『今昔物語』中の箇所は「夜半許ノ程ニ馬ニ乗レル人二三十騎許来リテ……」(十四ノ34)となっている。

(向) 翻案として現われる「程」の例

(25) 至明年二月 里人始登此山到来 (下91)

春二月許ニモ成ヌト思ユル程ニ、郷ノ人等此ノ山ニ自然ラ来ル (十三ノ18)

このように、変体漢文系においても、原典に現われているものが、そのまま使われている例もあるが、むしろ、漢文訓読文と同様、こうした接続形式は、原典の翻案に現われるとみた方がよい。すなわち、文体は確かに原典に影響されているが、「間」「程」そのものが、原典から直接受ける影響は、それほど大きくはないといえよう。そこで、たとえ原典と現在の『今昔物語』との間に、中間媒介物の存在が考えられるとしても、こうした接続形式の意味用法を考える場合には、むしろ、『今昔物語』全体を、院政期仮名交じり文の一資料として、一つの大きな mass とみた方がよいのではないかと思われるのである。

3 『今昔物語』における「間」と「程」の意味用法

『今昔物語』全体を一つとして扱う事にしたので、次に、本朝前部を対象として、「間」と「程」の意味用法に違いがないのか、もし、違いがあれば、文体に関わりなく両者の現われる可能性があるといえるのではないかという事について考えたい。

『今昔物語』においても、「間」と「程」はほぼ同様の接続用式を有しているが、特徴的な事は、前件の動詞を比較してみると、

(26) 暁ニ成ル程ニ、少シ寝入タル夢ニ…… (十三ノ32)

(27) 夜モ皆暁畢ル程ニ、大キニ黒キ煙、三筋許……中略……見ユ (十二ノ20)

「…(時刻) になる頃に、時分に」という用法に、全て「程」が使われていることである(他に十一ノ22、十九ノ11など本朝前半部で十七例)。これは、第一章で考察した史の変遷からみてもうなづけることである(変体漢文系に侵入する「程」⑧の用法)。

ところが、第一章で示した、ある一点のまわりを漠然とさす「程」⑧の用法を、今昔物語では、全て「程」が担っているわけではない。前述したように、「間」が継続性のない動詞につき、「…(スル)時」「時分」を表わす例がある。

(28) 僧喜ビテ罷リ出ヅル間、御祈ノ僧共、殿ノ内ノ人共ノ見タル気色共、極テ止事無シ (十四ノ35)

また、継続性のある動詞を前件としても「時」や「折」を表わす例がある。

(29) 江頭ニ至テ船ニ乗ケル間、彼ノ龍興寺ノ僧共、和尚ノ出ヅルヲ見テ惜ミ悲ムデ、泣タク止メケレドモ…… (十一ノ8)

これは、「船に乗っていた間」ではなく、「乗ったが、その時」の意である。

山口堯二先生は、「その体言（に）」などに上接する時間、空間的意義の体言——筆者注が「に」などと熟合して一つの接続形式に転化していくことは、とりもなおさず、本来の時間、空間的意義よりも、上接句の判断を相関的に対象化する作用性を、それらの形態が卓越させていくことであつたと考えてよい。」と述べておられ、更に「あひだ（に）」「ほど（に）」を、接続助詞「に」の関連形式として、基本的には場面性の関係において接続に関与するところとせられる。^(注2)『今昔物語』における「間」は、接続助詞化の成熟に伴い、既に時間的に処理できるものではなくなっている。しかも、その用法は、接続助詞「に」との関連形式というより、むしろその代用とさえいえるものである。例⑩はその表われといえよう。これは、漢字主体の仮名交じり文の一つの特性、助詞「てにをは」を表わしえない変体漢文の影響ととらえられる。現代語では継続的、生起的と区別される「間」「間に」の相違が、『今昔物語』では意味をなさず、両者同様の使い方をされていることからそれはうかがえよう。「に」との熟合化に伴い、助詞を伴わない体言そのものが、「体言＋に」の役割を担い、ついには、本来、判断の対象化と上下句の関係をより分析的に表わしていたはずの体言そのものすらその意義を失って、和文系における単なる「に」の役割を担うようになったのだろう。その中でも、ここで多用されているのは、単なる上下の結合としての「間（に）」である。例⑪⑫等、こうした原典の二つの文を一つに結合する際に「間」が多用されているということは、とりもなおさず、「間」の体言としての意義（以下、体言性と仮称する）

が失なわれ、単なる叙述の結合としての意味しか持たなくなっているからである。逆に言えば、こうした用法を持つからこそ翻案の際に多用されるといえるのではないか。

では、このような「間」と「程」の意味用法の違いはどこにあるか。第一に、もし両者に意味の違いが認められるとするならば、それは体言性の残る部分であるということだ。例⑬⑭に代表される「程」の用法は、体言性が残る顕著な例なのである。その証拠に、たとえば例⑮を接続に用いず、「少シ寝入リタルハ晝ニ成ル程也」とすることは可能である。例⑯も、体言性を十分に有しているからこそ、「夜半ノ程ニ至リテ」とも読めるのだし、例⑰などは翻案ではあるが、意味的に「程」でないといけないのではなかったか。「程」⑱の用法は、「程」の体言自体としての意義なのである。それに対して、「間」が「ノスル時」「時分」を表わす用法を持つ為には、どうしても接続助詞化が必要であつた。

更に、「間」の接続助詞化は、「程」に比べてより進んでいたと考えられる。もちろん「程（に）」にも体言性を失って接続助詞化しているものもあり、また原典翻案に用いられているものが、前述のように、主に和文系に用いられた「程」は、接続助詞「に」の行なう上接句の判断の対象化をより分析的に表わす意義を有し、その体言性を維持する場を「間」よりも明瞭に持っていたといえる。『今昔物語』において「間（に）」は、因果関係の有無、或は、順接、逆接の別に関わりなく接続に関与しているといつてよいが、後の『平家物語』では、既に「間」は理由を表わす接続助詞化してしまっている。ここに、史の変遷過程による整理と再分化がみられるように思う。同様の意味を持つものが衝突し、意味分化をひきおこす。意味

の広がりすぎた「間」は、因果関係を有する面のみが強調され、その用法に絞られていき、逆に時間的意味は「程」が担うことになるのである。そうしてこの後、「程」は「間」より少し遅れて、理由を表わす接続助詞化の道をたどったが、その時期のずれに、こうした接続助詞化の進行度が、何らかの影響を及ぼしているとは考えられないだろうか。

以上、主に『今昔物語』における「間」と「程」の意味用法の違いを検討してきた。その結果、「間」と「程」には意味用法に差異があり、全く同様とは認められないという結論に達した。だが、それが、本朝前半部の「程」の用例数に影響を及ぼしたとは言いがたい。前件の動詞による比較検討での差異も、比率のうえでそう大きくはならない。むしろ、こうした意味用法上の差異も、和文系、変体漢文系における接続形式の違いが反映されたものと見ることができただろう。

むすび

本稿は、「間」と「程」の使用区別の様相を、時代の推移、文体、意味用法の上からみていこうとしたものであり、その一段として、『今昔物語』における一問題——何故、『今昔物語』本朝前半部に「程」が多いのか——を扱った。その結果、次のような事が考えられた。

一、変体漢文自体の変質により、和文系に多用された「程」が、『今昔物語』前半部に影響を及ぼしたと考えられる変体漢文系にも、大きくはいりこんできた。

二、『今昔物語』本朝前半部に、多くの和文系説話が混入しており、その多くが、出典未詳説話と考えられる。

三、『今昔物語』において「間」と「程」には、意味用法に違いがあると思われるが、それが前半部の「程」の用例数に影響を及ぼしたかどうかは疑問である。

では、こうした手段を用いた結果、考察された「間」と「程」の使用区別の様相と、その史の変遷過程における『今昔物語』の位置は、どのようなものだろうか。

『将門記』『土佐日記』あたりを境として位相的文体的未分化な状態から、変体漢文系では「間」和文系では「ほど」を用いるという文体的分化が行なわれた。しかも、その分化には、それぞれの意味の差が反映していると考えられた。更に、この分化は、それぞれに意味の拡大をもたらした。時代の変遷に伴って、文体に関して統合の動きが見え、仮名交じり文という文体的にも、「間」「程」の意味用法の上でも拡がりをもった形態を生み出す。この代表が、『今昔物語』であり、ここでは、「間」と「程」が最も混然と使用されているのである。しかし、これを境に文体は融合期を迎える。中世は、漢字仮名交じり文を主体とする現代日本語の基礎と呼べる文体が現われつつある時期で、「間」「程」といった語も、それまでに現われた意味用法が、史的に整理され、再分化されていく過程とみてよい。それが、意味の差となって現われ、「間」が完全に原因、理由を表わす接続助詞になったのではないかと考えられる。すなわち、こうした史の変遷過程において、『今昔物語』は、文体的分化期から文体的融合期への過渡期にあるといえよう。そして、「間」と「程」の意味の差と位相的文体的差異というものは、お互いに関わりあいつながら変化してきたのである。

使用テキスト

『万葉集』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『古今集』、『土佐日記』、『落窪物語』、『日本霊異記』、『平家物語』上——『日本古典文学大系』

『源氏物語大成』(中央公論社)

『大鏡の研究 上巻 本文篇』(桜楓社)

『徒然草総索引』(至文堂)

『将門記』——東洋文庫所収本

『小右記』——史料大成所収本 上巻

『御堂関白記』(上)、『後二条師通記』(上)(中)——大日本古記録所収本

『諸本対照三寶繪詞集成』(笥間叢書)

『日本往生極楽記』——群書類従所収本

『法華験記』——統群書類従八輯上所収本

『冥報記』——大正新脩大藏經五十一所収

『今昔物語』——『今昔物語文節索引』、『日本古典文学大系』をもとに、小学館『日本古典文学全集』参照

『今昔物語』——『今昔物語文節索引』、『日本古典文学大系』をもとに、小学館『日本古典文学全集』参照

注記

① 文とはならないで、主語＋述語の形式を備えている単語連結を仮に句と称する。(峰岸明『今昔物語集における変体漢文の影響について』『間』の用法をめぐって——『国語学』36参照)

② この用法の「間」の定訓が「アヒダ」であることは前記注①の論文参照。また『万葉集』「間」字の「ホト」訓は、原田芳起氏「万葉集の「間」字の訓義をめぐって」『権隆国文学』二における見解に従い、「アヒダ」訓とする。

③ 変体漢文の定義については、前記峰岸氏論文注⑥による。

④ 前記注①論文。

⑤ 松尾拾「文体をはかる語彙」『語文』(日大)21。

⑥ 原田芳起前記注②論文、濱田敦「肯定と否定——うちとそと」『国語国文』一

⑦ 前記注⑥論文。

⑧ 『大和物語』には「おもひてすみけるほどに……」の形が見え、「落窪物語」には「しほど」の形が現われる。例(1)参照。

⑨ 築島裕「土佐日記と漢文訓読」及び「変体漢文研究の構想」共に『平安時代の漢文訓読語につきての研究』所収。

⑩ 前節で示した、和文系で「ほど」が過去形をとるようになるという変化も、この意味範囲拡大の一つの現われとみられ、その変化の境目も、今、問題としている文体的分化と期を一にしている。

⑪ 『日本国語大辞典』(小学館)。

⑫ 「接統助詞的な『間』について」『大東文化大学紀要』三。

⑬ 遠藤好英「平安時代の記録体の文章の性格試論——『殊』(ことなる)と『指』(させる)をめぐって——」『文芸研究』64、及び「記録体の文章における連体格の『別』——その読みと性格——」『国語学研究』12。

⑭ 出典は全て小学館『日本古典文学全集』による。

⑮ 八対の目じるし語、及び説話の分類の基準は、松尾拾「今昔物語集の文体の研究」(明治書院 昭42)参照。

⑯ 巻十四から巻二十までの出典未詳説話七十八例中五十三が含まれた。

⑰ たとえば十二ノ28では「程」間、共に三例ずつ、同33では「程」四例、「間」五例等。

⑱ 加納協三郎「院政鎌倉期に於けるダニ・スラ・サヘ」『国語と国文学』第十五巻十号、山田敏「今昔物語集における和漢の両文脈の混在について」『国語と国文学』第十八巻十号、同氏の「今昔物語の文法」『日本文法講座4』など。

⑲ 表三、表五、「後二条師通記」の用例数等より、変体漢文系においても、「間」三分の二以上という線が基準におけるのではないかと思う。

⑳ 前記注①論文。

㉑ 「接続形式の分析化——判断の対象化を中心に」『国語と国文学』（昭和56・5）。

㉒ 『古代接続法の研究』（明治書院 昭55）。

㉓ 表一において、「和文系」ほど「て」「に」がつかなくなるケースが、中古後半から増加していることも、その一証となろう。

〔追記〕本稿は、昭和五十七年一月提出の卒業論文をまとめ直したものである。稿後、内容的に関わるころのある、鈴木恵「原因・理由を表わす『間』の成立」（『国語学』128）が出たので、あわせ参照されたい。